

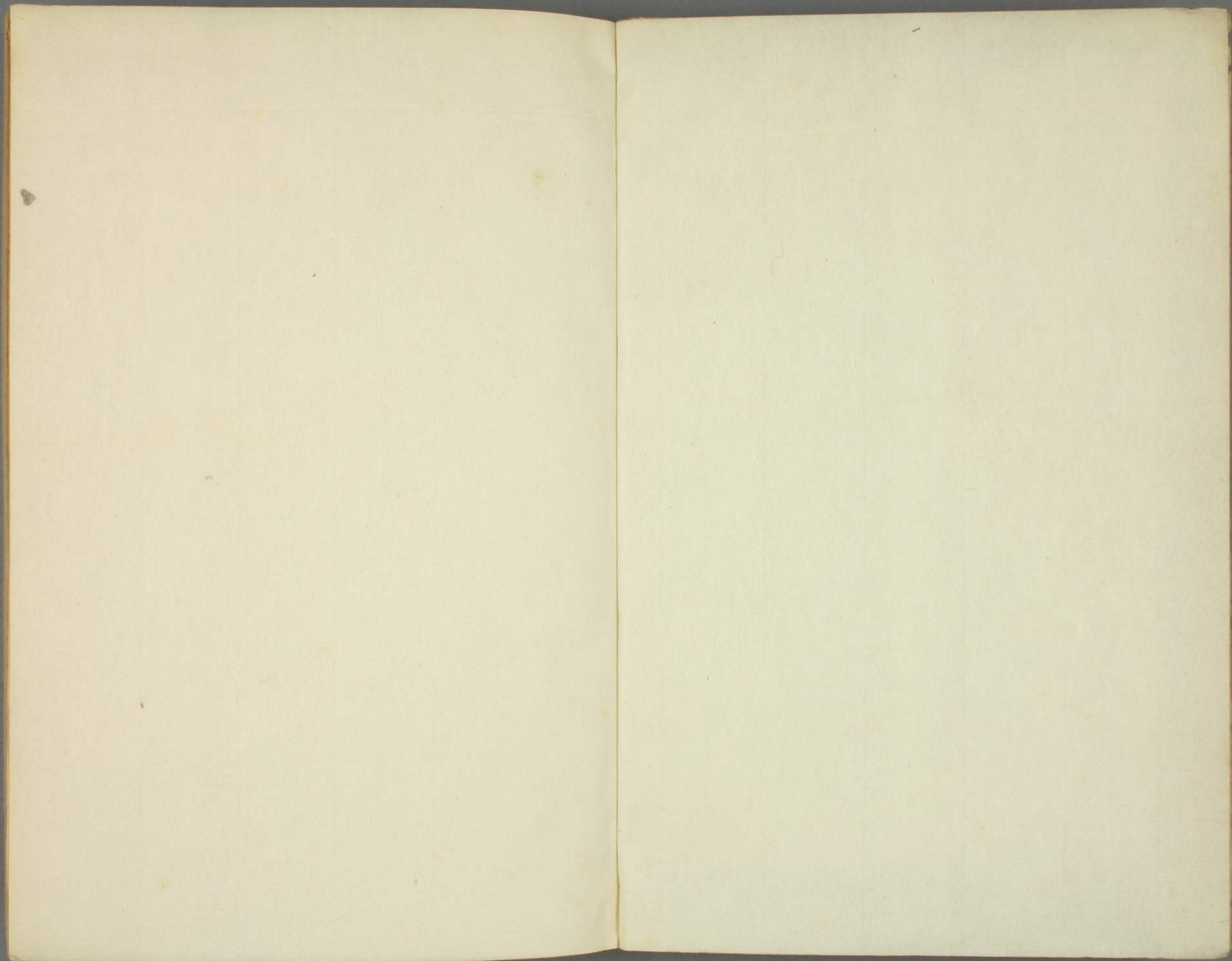


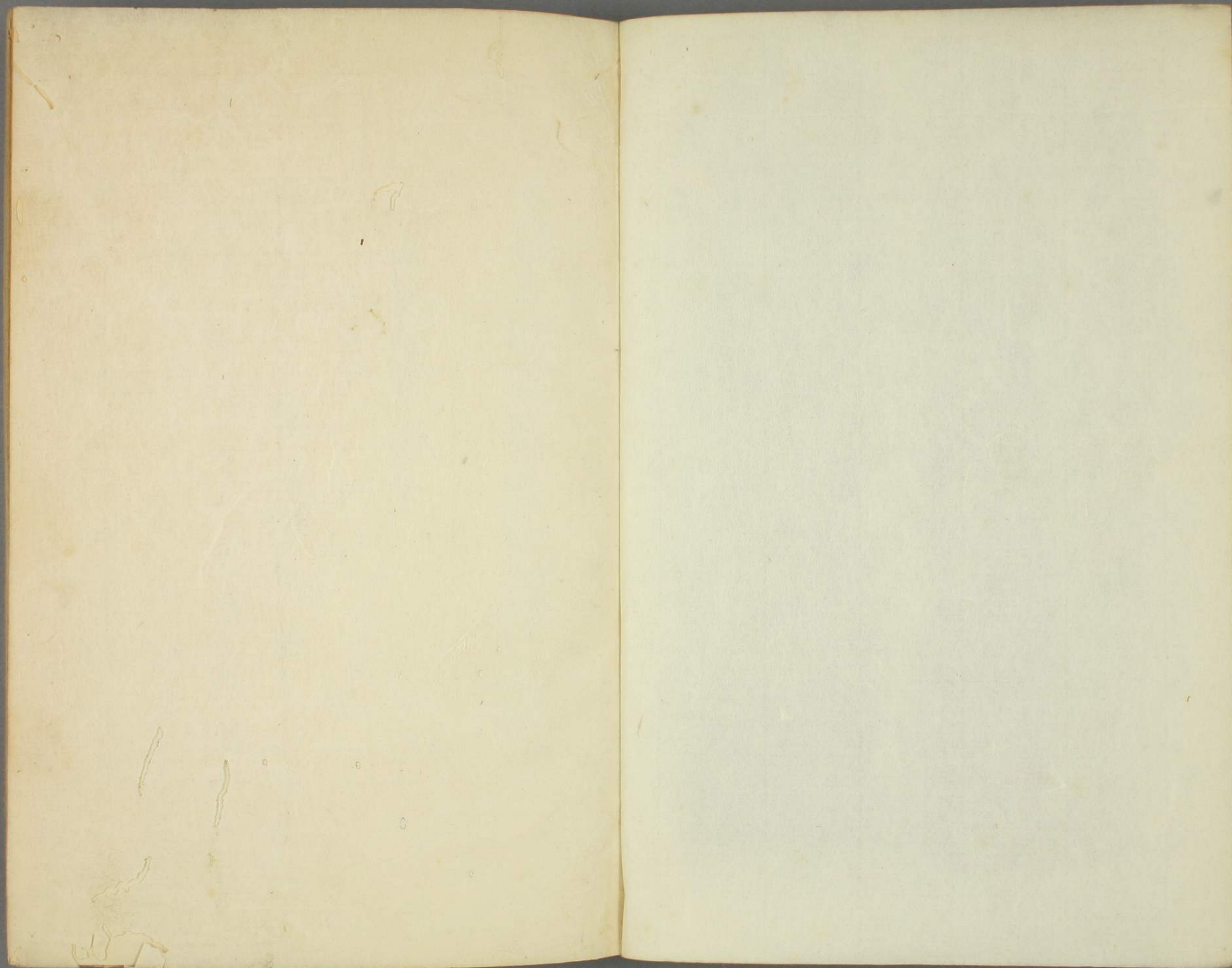
家忠日記

十四之十五

リ 5
2687
7







門 5
2687
卷 7

家忠日記追加卷之十四 自慶長五年二月至同年七月



慶長五年庚子

正月小



一日列侯以下大阪ノ城西ノ丸ニ登テ 大神君ニ謁
シ新正ノ賀儀ヲ献ス 秀頼大阪ノ城本丸ニ在
例ノ如ク朔旦ヨリ五日ニ至テ諸大名及テ近習
外様ノ面ニ城ニ登リ秀頼ニ謁テ各歳首ヲ祝ス
羽柴肥前守利長野心アルノ由去年ヨリ此春

ニ至テ巷説止ス依之 大神君利長ヲ疑ヒ玉リ利
長其御疑ヲ散セシ為ニ利長カ母芳春院及ヒ家
臣等ノ贊ラ江戸ノ城ニ指下スヘキノ旨ヲ達ス依之
大神君御疑心散テ文和成ル

二月六

七日武州江戸ニ於テ 台徳院殿近習ノ士松平
十三郎カ馬ノ尾ニ鼠巢ヲ成子ヲ産

三月小

九日 大神君ノ御家又安藤九助次基川丹市助

ニ遺恨有テ次基獨川丹カ宅ニ馳テ忽ニ川丹ヲ
刺殺ス川丹カ從士等競ヒ集テ次基ヲ討ニト
欲ス次基其場ヲ遁ルト云斥疵ヲ被テ遂ニ死ス

次基ハ帶刀
直次カ弟

秀頼信州善光寺如来堂ヲ終補ス去ニ年ヨリ
信州木曾ノ梯朽損テ往来通路自由ナラズ同
ク伊奈ノ河橋モ破損ニ及フ間兩所ノ橋此春
奉行ニ命テ補續セラレ上校景勝去ル秋奉
因ニ下ルノ後及逆ノ企アルノ由其聞ヘアリ依之

大神君景勝ヲ大坂ニ召テ其實否ヲ御紀明有
八キノ旨田冬ヨリ鈞命ヲ奉ルト云氏景勝命ニ
不應此春モ伊奈圖書ヲ以テ猶是ヲ召ス景
勝益命ヲ拒依之 大神君東国ニ御進出有
テ速ニ景勝ヲ御征伐有ヘキノ旨諸士ニ勅催凡

四月小

一日大神君豊光寺ニ命テ景勝カ臣直江山城守
兼續カモトニ書簡ヲ遣ハシテ王ヲ
七日阿部伊予守正勝六十歳初名善石門尉卒ス其子河部備

中守正次初名善九郎台命ヲ奉テ父ノ遺跡米地五千石ヲ續
テ書院番ノ隊長ヲ役ス松平忠明奥平美作守信昌カ四男從
五位下ニ叙シ下總守ニ任ス安藤五九衛門尉重信
初名彦十郎從五位下ニ叙シ對馬守ニ任ス

五月大

三日直江山城守兼續カ返簡大坂ニ來ル
今朝日ノ事申作十三日ト云其ノ事好見之事
一為國ノ事お京大坂往ノ難役有シニ事也
内府所出不富ノ由云々事及事好見之事

東大極の旨の成色として老説を以て其の説述を
と云ふ又京陽若輩又と云似有る所難説と好
不若と云ふ条より其の旨の成色として其の旨
則古事

一京陽上洛迄の旨の成色として其の説述を
と云ふ旨の成色として其の説述を
上洛迄の旨の成色として其の説述を
京陽迄の旨の成色として其の説述を
と云ふ旨の成色として其の説述を

上洛迄の旨の成色として其の説述を
京陽迄の旨の成色として其の説述を
と云ふ旨の成色として其の説述を

一京陽迄の旨の成色として其の説述を
と云ふ旨の成色として其の説述を

一大岡の年京陽迄の旨の成色として其の説述を
と云ふ旨の成色として其の説述を

一京陽迄の旨の成色として其の説述を
と云ふ旨の成色として其の説述を

此乳明通心と云ふこと万石兵衛の實名書
此後年々その方角よりお母の御名を
内府御由表裏と云ふ事あり

一北國肥前守殿御由表裏と云ふ事あり
此より後、事

一樽右大掾少内出陣之由御重之好用御表
お有り志すべし御。御式大志し表し御表。
御の京侍通心馬表と云ふ事あり
一内府御由表裏と云ふ事あり

此年書之御書之御監物表裏と云ふ事あり
才覚と云ふ事あり御書と云ふ事あり
一御書と云ふ事あり御書と云ふ事あり
一御書と云ふ事あり御書と云ふ事あり
上乃武士と云ふ事あり御書と云ふ事あり
御書と云ふ事あり御書と云ふ事あり
御書と云ふ事あり御書と云ふ事あり
御書と云ふ事あり御書と云ふ事あり
御書と云ふ事あり御書と云ふ事あり
御書と云ふ事あり御書と云ふ事あり

即此位と事なる事

一才之道と作舟橋の在りて還に故舟に
下付に相西に彼段に案如法に等しく
し永橋と浦濱に後路に飛りて又同底
監物に存り監物ありて橋ありて京路本
中より多勢と云て行果の何なるも大
哉道に永橋と事なるも不存に京路
旧領に後と事なるも不存に京路
お馬に宗領に在り上田村仙山に在り

道に飛りて又八日前の旨自案に領主有行
其少の地は凡そ其監物計有なりと上橋
付る物に虚説と申成しと事京路に不
存に甘分ありてと事古に事ありて不
有同案に能合に京路に事ありて不
力しと事其法方に依りて切塞の言に傳
防戦に事ありて事ありて四方に及ん
要言に後路と事ありて自然に事
と事ありて一方に其防に事ありて況

泣きし拒守畢く可き事不承け又他郡
一歩進めたる方へは京師を為す人存せ
可出の法候と察向ありては事ある可
然し遠心と正道と行り永橋と名する可
ありしを事の中へは是れ虚言と
思ふて下る京師の内道橋と名する辭は
江戸前と西使来る川口と河津に付る由尋
む事なる程に事ありし由信使と指
下りて題目は孫も見分おとす事あり

由合ふなり

一 幸卿等兩河に之を以て存虚言と承け候に
乃自他信借しりて事ありし由に凡言兼
傳来ありし事一年に由人存せり候
候と下る由虚言候一実

一 京師の年三月者福信追討ありし事
此に傳へありし中へは事ありし由に
存り候事同し人候と集り候と調候
一 抱國の軍役ありし事ありし由に

者を以て出は者くまの尋すべく高岡に
りしり高岡の御心り 内府御前表裏
の世よりておの御心り。

一 千万向し不入京務の心毛尻事と、元上洛
の御成法御方便の御心、条石存是派、楚上
の 内府御前御心、御心の上洛の仕、御心
は侍に玉は、大岡之御心、御心、御心、
御心と及古より、御心、御心、御心、
内府御前御心、御心、御心、御心、御心、

御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、

一 京大御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、
御心、御心、御心、御心、御心、御心、

一益者 内府様へ以てはさすべくも存
しは信條必強人頻に経てく虚説を
可し者人故因能也さすなり報逆應然
可し思言也し尚考信とり中事い還る表
裏者し東一上の為内府様と成るる
明いあていはせしり上りるも全
通打首い毎本さ我なり
一何事し左遠国推量は美に条有候言
に我の先世様い奈情をさすりるも自

物に実候の由は私に承りて言ひ候
に御の目候と云夫りて事と云存るに
い言に我美い事なり其候上之存
安し也いさ外ありは其意に伸
為一は言ふ事不願其候と由は士妻
五津白

四月十四日

直江城守五續

豊光寺の信者申

一才一虎頼御而禱山神也其大坂子山兵衛
の成法よりり経るる一は法入平と云可
至存・此乃東玉・兩下向由成之雲靴
之由之故一は成法之法人誰患不付・於
是亦為年之象ハ兩下通之也ハ云ハ
近方ハ一ハ云ハ云ハ云ハ

一先之兩兵糧山道ハ長前之至去年不作
仕殊更也力年ハ銀糧ハ無之奉存・兩兵
糧之候也ハ云ハ云ハ云ハ又雪前之由也

小治了一ハ云ハ云ハ云ハ 即出馬ハ成法子
と云ハ云ハ云ハ

乙酉七月

長東古藏古傳
增白右衛門尉
徳善院云以
中村或幼女傳
生駒雅樂頭
坂尾帶刀

廿日羽柴肥前守利長カ母院芳春及之家臣前田

對馬守横山山城守太田但馬守山崎長門守等
カ子共各今日伏見ヲ登テ武州江戸ニ赴ク

六月小

六日保科彈正カ女ヲ以テ 大神君御養女トシテ
黒田筑前守長政ニ嫁セシメ玉フ此日羽柴利長
カ母及ヒ家臣等カ質江戸ニ至ル

十日大神君景勝御征伐トシテ東國會津ニ至
テ攻入ルヘキ其軍列ヲ定メシメ玉フ白川口ハ會津ヨ
リ隔 大神君 台徳院殿西君信夫口ハ大崎少將

正宗米澤口ハ會津ヨリ最上出羽守義光津川

口ハ羽柴肥前守利長ヲ先陣トシテ羽柴久太

郎秀治村上周防守溝口出雲守等ニ是ニ向

ハシメ玉フ七月廿日各會津ニ至テ大牟掬子一同

ニ乱入スルキノ旨ニ兼テ諸將ニ命セラル

十一日大神君大阪ノ城ヲ御首途有テ東國ニ御

進發アリ此日伏見ノ城ニ着御

十七日大神君伏見ノ城ニ御滯坐伏見ノ城主トシ

テ松平主殿助家忠鳥居左右衛門尉元忠内

藤原次右衛門尉家長長松平五右衛門尉近正ヲ以
テ伏見ノ城ヲ守ラシメ至フ 大神君四人將ヲ各
御前ニ召テ命有テ白石田三成カ所行御疑心
アリ依之今度當城ノ警備其器ヲ撰フ汝等
ソレ是ニ當レリ因テ此城ヲ守ラシムルノ間懈ル
事ナカレ深ク謀テ勇ヲ勵シ忠義ヲ尽スヘキ
ノ旨台命ヲ蒙ル是武門ノ面目也又羽林ヲ加ヘ
十八日 大神君伏見ノ城出 御京極宰相高次大津
ノ城ニ於テ惣良膳ヲ献ス于時 大神君高次ヲ御

前ニ召テ御膳指^吉ヲ賜ル高次カ家臣御前ニ
出テ 大神君ニ謁ス各禄ヲ賜ル差アリ石部ニ
着御アルノ処ニ水口ノ城ニ於テ惣良膳ヲ献ス度
ノ旨長東大藏父子石部ニ来テ達ス長東父子
ヲ御前ニ召テ御膳指ヲ賜テ退出ス其夜ノ
戌ノ刻ニ不図石部ヲ出御有テ夜中ニ水口ヲ
通り過サセ玉フ依之長東カ支度相違ス
十九日関ノ地蔵ニ着御
二十日四日市場ニ着御其夜船ニ乘テ三列伏冬

島三郎著船より田中兵部大捕長改此処に於て郷食
膳ヲ献ス

廿日御船ヲ竹篠宮ニ寄セラレ此日吉田ノ城ニ
シテ池田三九衛門尉輝政郷食膳ヲ献ス

廿日白須賀ノ取ニ著御

廿三日昼濱松ノ城ニ於テ堀尾信濃守忠氏
昼餉ヲ献ス又ノ帶刀吉晴越存ニアリト云
氏爰ニ来テ大神君ニ謁ス于時吉晴暇鷄
テ越存ニ赴リ大神君昔中泉ニ著御

廿四日昼依夜ノ中山ニ於テ山内對馬守一豊午
炊ヲ献ス其夕島田之取ニ著御

廿五日駿府ノ城ニ九中村式部少輔一氏ノ家
臣横田内膳三ノ宅ニ入御アリ式部少輔一氏肩
輿ニ助ケ乘セラレ即前ニ候ニ大神君ニ謁シ
一氏重病ナルニ因テ今度會津御進忍兵供奉
セサル一是死後ノ遺恨ナリ愚子一學子幼年
タルノ間一氏ノ弟中村彦九衛門尉ヲ隊長ト
シテ一氏ノ軍勢ヲ相副ヘ會津ニ至テ供奉

セシメント歎スルノ旨ヲ達ス一氏重病シテ因テ
言語不明ナラス良有テ一氏新村加兵衛尉
資良大藪新八郎小倉忠右衛門尉等三人ヲ
右ニ推テ言テ曰是新村加兵衛尉資良徳シカ父
新村筑後守資則ハ江州新村ノ城主ナリ元
龜元年ニ織田信長ト兵ヲ締ヒ勇ヲ振ヒ街ヲ
及スト云凡信長多勢ヲ卒攻討ノ間資則遂
ニ利ヲ失ヒ城ヲ避テ遊客ノ身トナリ江州ニ蟄
居ス資則武名有ニ因テ一氏は之ヲ招キ是ヨリ

先キ一氏カ姪ヲ以テ資則カ子加兵衛尉資良
ニ嫁セシム一氏婚嫁タルニ因テ最是ヲ慇懃
ニス時宜ニ依テ御家人ニ屬セシメ奉仕セシ
ノ願フ由一氏伏テ釣命ヲ伺フ 大神君命
有テ曰資良カ武名勇テ台聴ニ達ス其上一
氏婚嫁タルノ間自今テ以後資良幕下ニ屬シ
軍忠ヲ勵スヘキノ旨台命ヲ蒙リ即資良
ヲ御前ニ召テ始テ 大神君ニ謁ヒ是ヨリ資
良御家人ニ屬ス 其後江州蒲生郡ニシテ食禄ヲ
賜ル時ニ釣命ニ依テ新村ヲ志村改

又大敷新八郎小倉忠右工門尉之資良下同之摩
下二屬人

此日 大神君清見寺之者御

廿六日沼津ノ城ニ於テ中村彦左衛門尉經會膳
ヲ献ス大久保相摸守忠隣本多右渡守正信
等此馭ニ迎ヘ奉テ 大神君ニ謁ス此日三島之者御
廿七日小田原之者御 廿八日藤沢之者御
廿九日鎌倉君へ台駕ヲ寄テ之鶴岡八幡宮ニ御
社冬有テ終造ノ事ヲ命セリ

七月大

今度 大神君會津御祭陣ノ供奉トシテ東国
馳下ルノ輩福島左衛門大夫其子福島飛部大
輔弟福島掃部頭池田三左衛門尉弟池田備
中守羽柴越中守^{細川}其子羽柴与市郎京極
侍從伊賀侍從^指淺野左京大夫田中兵部大
輔其子田中民部少輔堀尾信濃守山内對馬守
有馬玄蕃頭中村彦左衛門尉藤堂依渡守加藤左
馬助里田甲斐守蜂須賀長門守生駒讚岐守

寺沢志摩守富田信濃守古田兵部少輔箱蓋藏
人織田有樂其子織田河内守金森林出雲守德
永龙馬助九鬼長門守今部左京亮古田織部宗
出遠江守市橋下總守桑山相摸守亀井武藏守
石河伊豆守船越五郎右衛門尉依_レ法路守池田備
後守天野周防守依藤三河守依久間河内守三好為
三同姓新右衛門尉津田小平太神保長三郎水野河
内守秋山左近大夫中川半九衛門尉丹羽勘助鈴木
越中守兼松又四郎長谷川甚兵衛尉本_レ松兵衛尉

栢植平右衛門尉別所孫次郎村越兵庫頭山岡道
阿彌等各 大神君驥尾_ニ從_テ追_テ御跡ヨリ東國
_ニ馳下ル

五日大谷刑部少輔吉継越前國敦賀ヲ登_リシテ
東國_ニ既_ニ江州_ニ依_テ和山_ニ至_ル石田治部少輔三成去
年ノ春ヨリ佐和山_ニ閉居スルノ間大谷石田ヲ推_カヘ
東國_ニ登_ル向_セト欲スルノ処_ニ石田大谷ヲ兩所_ニ招
テ今度 大神君東征ノ弊_ニ乘_テ吾謀_ヲ及_テ企
ント相計_リ由_リ宥_カ竊_ニ議ス大谷聞_テ掉頭_シテ曰

今ノ世ニ 大神君ニ敵對シ兵ヲ征
ニ入ニ似タリ汝ハ去年諸人ニ惡
ニ及ノ時 大神君ノ大仁ニ因テ一
ニ其厚恩ヲ忘レテ逆意ヲ
テ諫ルト云氏石田聽カス大石
少テ濃州垂丹ノ宿ニテ往ト
好捨難キニ因テ垂丹ニ三日留
幡守ヲ以テ言ヲ尽テ相諫ル
ス大石石田カ密事ヲ聞テ具

道ニ非スト謂テ此月十七日每
ニ歸テ遂ニ石田カ逆意ニ一
今度石田治部少輔三成カ敬
城ニ馳集ルノ軍勢毛利右馬
斐守秀元備前中納言秀宗
吉川駿河守堅田兵部少輔長
高橋主膳正秋月三郎竹城紫
毛利民部大輔高田河内守藤
馬助生駒修理亮生駒主殿

秀包藤四郎
左近將監柳川
宗對馬守從侍

既ニ以テ殺害
命ヲ助テタル忍
生テ道ニ非ト
諫カ子ヲ佐和少
連年旧友
留ニテ平塚因
田曾テ許答セ
與ニナル旧友

井ノ宿ヨリ沈和山
逆ニ至リテ大阪ノ
頭輝元毛利甲
時久留米侍從
曾我部宮内少輔
上野今五島大和守
三河守早川主
助竹中伊豆守根

部之佐守横濱民部少輔奥山雅楽助多賀出
雲守枚若主殿助谷出羽守山崎左馬助同姓左
京亮赤松上野久川尻肥後守木下左京亮照坂
中務太輔等都合其兵九万三千七百十余騎大坂ノ
城ニ競ヒ集ル是ヨリ後大坂ノ城ニ馳加ルノ軍勢
數萬騎アリ

七日 大神君御書ヲ屋代左衛門尉勝永ニ賜ル
一 如實中納言及少國の助米澤ノ打出左衛門
礼ノ入リノ案内者トシテ向先ヨリ山形者

カ中納言及下ノカ務奉事

一 至月ヨリ中納言及下ノカ務奉事
一 敵後佐佐木川筋の傳シ及テ師を及テ可也
口上ノ一ノカ務又村上因行ノ傳シ及テ可也
守及入ノ内ノカ務一人中納言及下ノカ務
及少出ノカ務一ノカ務奉事

七月七日 家康

為代左衛門守

十四日 石田三成使ヲ大津ノ城ニ遣ヒ質ヲ請フ

城主京極宰相高次元來 大神君志ヲ通シ
忠ヲ竭サント欲スルノ間三成カ使ニ不應依元大津
ノ城ニ兵ヲ送テ先ツ此城ヲ拔ント其軍列テ
定ム毛利宰相秀元ヲ大寺ノ首將トシテ其兵
三万余騎勢カ田ヨリ向ハシム備前中納言秀家
ヲ搦キノ首將トシテ其兵二万余騎関寺ヨリ
相向大石刑部少輔吉継父子三人其兵三千余
騎唐寄濱ヨリ乱入スヘキト相議テ大坂ノ城
ヲ攻テ既ニ大津ノ城ニ赴ント欲ス干時大石刑

部少輔吉継謂テ曰今度 大神君ト兵ヲ締テ
干秀頼ヲ天下ノ主タラシナシカ為也然ルニ京
極高次ハ寺閑ナラヌ御一旗タリ秀頼幼主
タリト云レ下トシテ我意ニカヤ上ノ門葉ヲ
討シテ後難免ル所ナレ今暫遠慮ヲ廻ラ
スヘキノ旨ヲ議ス大坂ノ諸將等各此義ニ同
シテ朽木河内守ヲ使トシテ大津ノ城ニ指遣
シ謂テ云不慮ニ干戈ヲ起ス干是全ク身ノ
為ニ非ス君ノ為也然レハ高次實テ大坂ノ城

ニ籠置キ秀頼ニ軍忠ヲ尽サシ事最モ本意
タルヘシ此美ニ同意ナキニ於テハ止ム事ヲ得ス
兵ヲ祭テ大津ノ城ヲ攻メ落スヘシト衆議ハ
決スルノ由使數度ニ及フ高次聞テ掉頭シテ
曰勿論秀頼ノ大事タルニ於テハ何ノ異美カ
アラン是ハ三成カ君威ヲ借テ己カ意趣ヲ達
セシト謀ル然ルニ於テハ不美ノ三成ニ與ヒテ
大神君ニ要約ノ忠志ヲ變セシ事沙汰ニ不及
大坂ノ多勢此城ニ寄來ルニ於テハ城ヲ堅守テ

是ヲ拒クヘシ若軍ニ利ヲ失フ時ハ城ニ火ヲ放テ
自殺スヘシト謂テ高次敢テ三成カ旨ニ不從テ
時家臣等高次ヲ諫テ曰一旦偽リ謀テ三成ト
和シテ質ヲ大坂ノ城ニ遣シ東國ノ安否ヲ聞テ
後旗ヲ揚ケ勢ヲ祭シ大坂ノ城ヲ攻討シテ是敵
ヲ謀リ家ヲ全スル思慮タルヘシト強テ諫ニ因テ高
次此美ヲ聽テ愛子熊若丸十歳及ヒ家臣四人
子ヲ質トシテ大坂ノ城ニ指遣ス依之交和成ル
十五日石田三成使ヲ伏見ノ城ニ祭テ城ヲ避テ

開キ渡スヘキノ旨ヲ説シム松平主殿助家忠内藤
弥次右衛門尉家長鳥居彦右衛門尉元忠松平五
左衛門尉近正四人ノ守将等是ヲ聞テ大神君ノ
幕下豪士多キカ中ニ其智謀武勇ヲ極シ此城
ニ留メ置置ル勇将トシテ上方ノ多勢ニ臆シテ城
ヲ避テ渡スヤリヤアル東兵ノ守ル城近國ニ於テ
此一城ヲ攻テ東兵ノ武勇ヲ試ヨト返答シテ
松平主殿助家忠鳥居彦右衛門尉元忠ト相議
テ伏見ノ城下ヲ燒拂テ堅固ニ城ヲ禦キ守ル

十七日 大神君御留主居トシテ大坂ノ城西ノ丸ヲ守
ラシメ玉フ依野肥後守大坂ノ城ヲ避テ伏見ノ城
ニ相加ル依之ニ成諸將ト議テ毛利輝元ヲシ
テ西ノ丸ヲ守ラシム 大神君ノ麾下ニ屬シテ東
國ニ供奉スル諸將ノ室家ヲ大坂ノ城本丸捕
リ入ル羽柴越中守忠興カ室城下ニ在リ三成使
ヲ遣シ城ニ入レント請フ忠興カ宅地城下ヲ去
ルヲ遠カラス因テ城中ニ在ニ同シ宅地ヲ改メス
指置ルヘキノ由忠興カ妻再三言ラズミテ相断

ルト云

數百

ニ入レ

士ノ妻

ニ非ス

留伊

忠興

於テ

昔

既

家十

汝等

美ノ

雅ノ

テニ

原勝

テ小

殺ス

福

成是

方ヲ不知忠興カ妻自殺スルノ後ニ云
懲テ諸將ノ妻子ヲ城ニ捕入ル事ヲ一ヲ圍ム
十八日大阪ノ多勢其攻口ヲ定ム伏見ノ城
城ノ大手西南ノ方ハ島津兵庫頭安云
對馬侍從名護屋丸東南ノ方ハ備前
ノ丸北東ノ方ハ筑前中納言城ヨリ西方
信濃守其外諸方ノ寄手ニ相加ル軍
左近將監筑紫上野ノ秋月長門守
内少輔木下右衛門大夫吉川駿河守毛利相

久苗米藤四郎高橋主膳正有馬修理
我部左衛門守織田左衛門佐木村伊勢守
守猪子内匠松若越後守杉若藤二
甚左衛門尉早川主馬助熊谷半次郎
守毛利伊予守伊藤孫吉郎平戸法印
部少輔岡田助三郎水吹大和守糟屋内
孫一郎岡田孫平次松浦伊予守矢部豊
藤加賀守駒井中務大輔石川掃部頭
中守福原右馬頭後藤大和守木村

長曾

利河内

柔原

飛驒

伊藤氏

高正雜賀

後守伊

下備

右衛門

尉南条中務少輔增田右衛門尉力從士福田源次
郎大岡作左衛門尉高田小左衛門尉長東大藏
少輔力從士伴五兵衛尉堀田圖書組木下周防守
銚定輕伊熊源助銚定輕伊藤弥吉上大島雲八郎
卒ノ頭引輕秋田助左衛門尉旗大十万余騎伏見城ヲ
圍ム城ニ楯籠ル守將鳥居彦右衛門尉元忠
内藤弥次右衛門尉家長依野肥後守本丸ヲ守
ル松平主殿助家忠松平五左衛門尉近正西ノ丸ヲ
守ル駒井猪之助治部少丸ヲ守甲賀依左衛門

尉岩間兵庫頭名護屋丸ヲ守ル上林竹菴大鼓
丸ニ加リ守ル寄手ノ多勢城ヲ圍テ攻撃テ城
兵堅ク是ヲ拒キ守ル

大神君 台徳院殿西君景勝御退治トシテ會津
ニ御発向ノ軍令ヲ諸士ニ下シ玉フ

軍法

一 喧噪口論田中御信正ノ上宮お遠近首上事名
不端理殊双方一ノ力御成取ル上或停事
或係知者ト好令者提モ臣布人程心也

事一系意爲之方印殊然其令用候
 能能亦子後日之入之方也
 一先子之不斷相見之由義四信の心也
 一先子之居致能能令高名有軍法上
 之不可方也
 一先子相傳の傳の五支軍中有一或の事
 九子可方之見然其之入乃其候と共
 之方由事但於有申ふに其備一也
 不可方也

一人相押之時不之相道由思ふ一有之根
 二通の事不可方也成敗事
 一徳事をり之入指圖之令道首之也
 一可方成敗事
 一時之方印候能能の相入之可方也
 一持能の爲軍法之亦一國七物の中
 四等用也但七物之亦之持之入
 一之爲一本事

- 一 於陣所を五段俵に為す事
- 一 小舟に押して俵にお文軍勢の如く置か
せしむる君根にお文とのか成りし
- 一 諸高堂押置狼籍田を俵の上に上りて
遠首を自見を以て力て成り事
- 一 水邊を交てたてし誠主馬に中回あり
付し他し俵にお文軍一切俵に事
- 一 軍紋の外人指し民何種し俵に力て
中回ありし日一石を以て年或具しる事

右の俵に俵にありし事何種し俵に力て
中回ありし日一石を以て年或具しる事

慶長五年七月日

十九日 台徳院殿景勝御征伐トシテ江城御進
 發アリ供奉重軍結城少将秀康松平下野守
 忠吉羽柴藤三郎秀行生蒲松平下総守忠明
 井伊兵部少輔直政柳原式部大輔康政本多中
 務太補忠勝真田伊豆守信幸石川玄蕃頭
 松平飛騨守仙石越前守山川民部大輔日根

野德太郎等都合其兵六万九千三百余騎御
佳例タルニ依テ榊原式部大輔康政ヲ以テ先馳
ニ定ナラシム先陣既ニ仇久山太田原ニ進ムノ時後
陣ハイニ夕古河栗橋辺ニ充滿ス此日勢州表
ニ兵ヲ祭ル大坂ノ逆徒等安藝守相其臣完
戸備前守長束大藏大輔長曾我部宮内少輔
安国寺吉川駿河守山崎左近大夫蔭田權
之助松浦安太夫等三万余騎関ノ地藏安野
ノ津ノ辺ニ陣ヲ張ル

廿日丹後国田辺ノ城ハ大神君ノ御味方トシテ
永岡玄旨楯籠テ軍忠ヲ勵サント欲ス石田三成
カ下知ニ因テ小野木縫殿助谷出羽守生駒左
近大夫藤掛三河守小出大和守枚原伯耆守
等數千騎ヲ卒テ田辺ノ城ヲ攻メト欲ス玄
旨豫メ此告ヲ聞テ久見ノ城ヲ避テ田辺ノ
城ニ楯籠リ堅ク守テ是ヲ拒リ
廿一日大神君會津御進祭トシテ江城ヲ御首
途此日鳩石著御

廿二日 大神君岩付ノ城ニ着 御此日ヨリ上方
静ナラケルノ由風聞ナリ

廿三日 大神君古河ニ着 御

廿四日 大神君野州小山ニ着 御石田治部少輔
三成叛逆ノ由此所ニ至テ注進アリ依之諸大
名小山ニ馳集ル干時 台徳院殿ハ宇津宮ニ
御陣坐アリ 大神君小山ノ御陣宮ニ上方ノ
諸將ヲ召テ美膳ヲ賜リ丹伊兵部少輔直政
本多中務太補忠勝及ヒ山岡道阿彌岡野江

雪斎ノ御使トシテ今有テ曰先ツ景勝御征伐
可有カ是ヲサシヲカレ上方ノ逆徒等御退治
然ルヘカテシカ各心底ヲ残サス言上スヘシ又上
方ノ諸將ハ皆以太閤亦吉ノ厚子恩ノ者也其
上石田三成ト旧友ノ好ミ有テ彼レニ与テ秀頼
ニ志アラシ非軍ハ吾レ聊モ是ヲ遺恨トセス暇
ヲ乞テ大坂ニ馳上リ逆徒ト同意スヘキト旨ヲ
命ヤラル諸將暫ク此迄答ミ違ヒス干時福島
左衛門大夫正則黒田甲斐守忠政カ云各妻

子ヲ質トシテ大坂ノ城ニ捨置キ麾下ニ属シテ
東国ニ奔向スルノ上ハ誰カ獨トシテ其忠志ヲ
変テ今テ以テ三成ニ去セン又景勝卿征伐ノ
事ハ暫ク御延引有テ先ツ上方ノ逆徒等
ヲ御退治然ルヘカ之ノ旨憚ル所ナク言
テ左右ヲ顧ルノ処ニ諸將各異口同意ニ此赴
宜ミカルヘキノ旨ヲ申上ル御評議敷返シテ
遂ニ先ツ上方ノ逆徒御征伐アルキニ決セラル
真田安房守昌幸次男左衛門佐兵衛子大石

形部少輔吉継カ縁類タリ又敬通ノ長奉人
石田三成ト連年朋友ノ好ミヲ深ス依之宇津
宮ニシテ暇ヲ乞テ逆徒ニ相加ラント欲ス
台徳院殿敷田是ヲ制止シ王フト云氏命ニ從
ハス遂ニ本國ニ帰逆徒ニ去リテ旗ヲ揚ル嫡
子伊豆守信幸ハ本々中務太補忠勝カ縁者
也故ニ以前ヨリ大神君ニ忠義ヲ竭サント欲
ルノ間老父昌幸ヲ持テ大神君ノ幕下ニ属
ス大神君彼レカ忠志ヲ存セラレ御書ヲ

信幸ニ賜ル

今度安房守ら孔ゆゑ処ニ日比之儀を不
相違ニ行て居る奇特十方ニ從事多佐
候まてトクニ同之儀具ニ有て侍る

セー九四の 家康

まの田伊三三三

三州新屋ノ城ヨリ小山ノ御陣營ニ飛脚到
来ス其注進ノ書ニ曰七月十九日水野和泉
守忠重三州池鯉鮒ノ駅ニ於テ不慮ニ變

有テ遭害ス其故ハ堀尾帯刀吉晴野心有テ
忠重及ヒ加ノ野江弥八郎ヲ殺スト云々依テ吉
晴カ嫡子信濃守忠氏ヲ小山ノ御陣營ニ召
テ既ニ忠氏ヲ擒ニセントス 台徳院殿彼レカ少
年ヨリ仁義ヲ乱サル事ヲ知り王ヒテ假令
父カ叛逆有ト云凡其子是ニ于セスハ争カ
同罪トセント暫ク其罪ヲ宥置カル 処忠
重カ家臣等カサ子テ子細ヲ注進シテ曰
堀尾帯刀吉晴遠州濱松ヨリ哉前ノ府ニ

赴ク三州ヲ過ル水野和泉守忠重堀尾
ト志深ノ朋友タルニ依テ居城芥屋ヨリ池鯉
鮒ノ駅ニ出向テ忠重堀尾ヲ享子ス然ル処ニ
又加々野江弥八郎来會ス漸ク酉ノ刻ニ及
テ堀尾沉醉睡眠スルノ間ニ加々野江水野
ヲ殺ス于時水野
六十歳堀尾是ニ驚キ目覺テ眼指
ヲ以テ加々野江ヲ刺殺ス水野カ家人等主
ノ敵ハ堀尾ナルト思テ其席ニ乱入テ堀尾
ヲ切ル一數ヶ所堀尾燈ヲ明ニシ色ヲ放テ

断ルノ間水野カ臣鈴木与八郎是ヲ制シ止ム
其間ニ堀尾從者室内ニ馳入り吉晴ヲ抱キ
取テ肩輿ニ即ケ乘セ池鯉鮒ノ駅ヲ去ル
加々野江カ所行其意趣ヲ知ラサル由ヲ註
進ス此事全ク堀尾カ不義ニ非ス堀尾勇
ヲ振ヒ水野カ敵加々野江ヲ討ノ間翌朝
大神君其子堀尾信濃守忠氏ヲ召テ父カ武
勇カラ褒衣セラル和泉守忠重カ嫡子水野
六左衛門尉勝成小山ニ在リ大神君勝成ヲ

召テ又忠重カ遺跡三州苅屋人城ヲ賜リ命
ニ依テ勝成小山ヲ起テ苅屋ニ赴ク于時
大神君忠重カ三臣ニ御書ヲ賜ル

初ル水ヲ取不テ至シ付合ニ此水果不存
是故ト知セ六カノ水ヲ取ルニ此水
ニテ水ヲ取ルニ此水ヲ取ルニ

上田信重
水原

上田信重
水原

上田信重

廿七日真田伊豆守信幸今度麾下ノ屬スル
忠義ニ因テ大神君ヨリ本領安堵ノ御書ヲ賜ル
今亦安堵ノ御書ヲ賜ルニ此水
實ニ神妙ニ知ル小堀ノ御書
其上乃上行ノ御書
其水ノ御書
其水ノ御書
其水ノ御書

廿八日上方ノ逆徒退治ノ命ヲ奉テ諸將小山
ヲ登テ江戸ニ至ル

晦日先日ヨリ逆徒ノ多勢伏見ノ城ヲ圍テ矢
ヲ放テ炮ヲ飛ニテ夥シク攻討ト云氏城ノ竈
ル所ノ軍勢義ヲ守テ命ヲ輕シ勇力不撓
氣屈ヤス拒キ戦フノ間寄手數万ノ多勢
タリト云氏城ヲ抜リ事ヲ得ス鉄炮ヲ以テ城
ヲ破ラント欲シテ四面ノ寄手兩ノ降ルカ如ク
鉄炮ヲ城中ニ放テ入ルノ間城壁ヲ亦破ル事

竈ノ如クニス然レ共城中能ク是ヲ拒ク城中
城下戦争ノ甚ク天ヲ響ク地ヲ動カス夜ニ
入江州長原ノ族敵ニ内應シテ深尾清十
郎カ守ル所ノ松ノ丸ヨリ竹坑前中納言秀
秋カ軍勢ヲ引入レ城中ニ火ヲ放ツ

家忠日記追加卷之十五

自慶長五年八月朔日
至同月二十九日

慶長五年庚子

八月小

一日伏見ノ城兵長原ノ族敵ニ内應シテ城ニ火放
テ寄手ノ多勢ヲ城中ニ引入ル勢明城既ニ半
焚ク城兵力ヲ尽スト云氏内外ノ大敵防キ難キ
依テ諸士皆大手ノ城門ニ相集テ是ヲ支ント欲
ス時ニ松平主殿助家忠黒糸ノ鎧ニ桃ノ冑ヲ著



シ累代傳ル処ノ名劔利カヲ帶シテ士卒ヲ指揮
シテ奮戦フ此ニ島津カ部將別所下野守ト
名乗テ築地邊ニ進ム主殿助家忠槍提テ突
テ出忽ニ別所ヲ追拂フ其後家忠軍士ヲ右
ニ推クヘ城中ヨリ進テ出コ勇ヲ震ヒ術ヲ尽シテ
苦戦シ敵ヲ追テ退ルルニ三回敵取テ近付事
ヲ得ス然リト云氏家忠左ノ腕ニ斬ラ被リ敵
ニ相當ルルノ數度ニシテ戦ヒ疲シテ依之城中ニ
歸リ入テ從卒ヲシ競ヒ来ル敵ヲ追退ケ家忠

遂ニ自殺ス千時四十六歳家忠カ從士松平九七郎島田久助
大原九郎次郎同姓長七郎鶴殿藤三郎原田内記
三浦右衛門八松平理々原田清七郎酒井助太夫宇
野久四郎眼部八藏横落熊藏酒井猪之助越
山甚一郎同姓喜太夫稻吉清助等ハ十五騎皆戰
死ス伏見ノ城ニ籠ル処ノ軍勢或ハ戰死シ或ハ自
殺城遂ニ陥ル主殿助家忠カ首ハ島津カ部將
別所下野守是ヲ得タリ島居彦右衛門尉元忠時
六歳首ハ鈴木孫三郎是ヲ討捕ル松平五左衛門

尉迄三十四時五首筑前中納言亦秋力從卒日復
角助田島甚右衛門尉相討之依野肥後守二重
込ノ銃炮ヲ放テ其筒サケテ横死ス駒井猪之助ハ
敵ニ紛テ城ヲ出奔ス安藤次右衛門尉定次左殿
ヲ射貫レ其矢ヲ拔テ奮戰テ遂ニ死ス又上林竹
菴戰死ス若狭少將俊勝後長嘯ト号ス大神君ノ命
ヲ奉テ伏見ノ城ニ加リ守ルト云氏敵ノ一々城ヲ圍
圍ニナル以前ニ城中ヲ出テ政所ノ亭ヲ守護シ其
後若州ニ赴ク依之天下統一統ノ後深尾清十郎ハ城ヲ出テ所領ヲ没収セラル

逐電ス伏見ノ城陥ル一全ニ深尾カ守ル所敵ヲヒキ
入レ城ニ火ヲ放ニ因テ也故混一ノ後深尾ヲ擣捕テ逐ニ斬罪セラル此日上ノカノ
逆從退治トシテ江城ヲ進発スルノ軍勢カ先陣ハ福
島左衛門大夫正則ニ命セラル檢使トシテ丹伊兵部少
輔直政本多中務太輔忠勝ヲ是ニ相副ラル其奈ノ
軍勢池田三左衛門尉輝政淺野左京大夫幸長羽
柴越中守忠興田中兵部少輔長政京極從理矣
中村彦左衛門尉九鬼長門守守隆蜂須賀長門
守至鎮此兩人又ハ逆從ニ于シテ大神君ノ麾下ニ屬ス寺沢志摩守廣高

黒田甲斐守長政加藤左馬助嘉明山内對馬守一
豊堀尾信濃守忠氏生駒讚岐守一忠稻葉藏
人通道古田兵部少輔重勝戸川肥後守達安本
多因幡守亀井武藏守等五万余騎江城ヲ攻メ
遠州掛川ノ城山内對馬守一豊カ居城也此城ヲ
以テ大神君譜代ノ士ニ相渡シテ一豊質ヲ小田原城
ニ遣ス依テ東海道ノ諸將等去事ヲ得スシテ城
城避渡シ各質ヲ獻ス是一豊カ忠義ノ計畧スル旨
大神君大ニ是ヲ感補シ王ヲ此日信州木曾士馬場半

左衛門 次山村甚兵衛尉千村平右衛門尉麾下ニ
属シテ小山ニアリ 大神君彼三人ヲ御前ニ召テ石川備前
守ハ木曾ノ代官ナリ今度逆徒ニ与ル由其聞ヘ有
河等速ニ本國ニ歸テ軍忠ヲ勵シ石川ヲ誅伐スヘ
キノ旨鈞命ヲ蒙リ千村山村則小山ヲ召テ信州ニ
赴リ馬場ハ暫ク小山ニ留メラシ木曾表一戰ノ
謀ヲ猶安ク馬場ニ命セラル其後馬場木曾
ニ赴リ木曾中ノ諸士ニ 大神君ヨリ御朱印ヲ
賜ル本多依渡守大久保十兵衛尉是ヲ奉ル

信州亦有中法信也先親らるる宗
各々皆と存の政あるは山岳甚と宗
三物ありの村平重の村助なるのし

慶長五年

一月朔日

本名

法をまゝに申す

土方勘兵衛尉去年ヨリ依竹カ領内ニ蟄居ス彼
カ累ナキノ昔雨露頭タルニ因テ大神君土方ラ小山
ノ御陳營ニ召テ謁ス土方ハ羽柴肥前守利長カ

親族タルニ因テ大神君ヨリ御使トシテ土方ヲ加州
ニ遣ハシメ玉フ是ヨリ先羽柴肥前守利長

大神君御味方ニ依テ東国ノ午合加州金沢ノ城
ヲ攻テ湊川ヲ取川ヲ涉テ三田山ニ陣ス小松城

丹羽五郎左衛門
尉長重是ヲ守ル拒キトシテ岡島備中守ヲ爰ニ留

置キ是ヲ守ラシメ順路ヲ避ケ湯山越ヘテ經テ
馳行此日ニ至テ利長及ヒ度子孫四郎利政
師ヲ帥テ山口玄蕃頭カ楯籠ル大聖寺城
ヲ攻ント欲ス小松ノ城ヨリ輕卒ヲ出シテ浮ヨリ

船ニ乗テ利長カ後陳ニ鉄炮ヲ放カクル利長カ軍
勢帰馬村ニ引入ル然ル処ニ小松ノ存候御幸塚ニ
在ル味方ヲ敵ト見誤テ小松ノ輕卒ヲ追退シ公利
長カ軍士是ニ乗テ炮ヲ飛シ矢ヲ放テ是ヲ追討
シト競ヒ掛ルト云氏日既ニ黄昏ニ及フノ間長途ヲ
追軍ヲ得ス兵ヲ収ム又大聖寺ノ城ヨリ輕卒ヲ鎧
橋ニ進メテ利長カ兵ヲ相支ニト敵ス利長カ軍勢
鉄炮ヲ放テ是ヲ追退ク此日 大神君小山ノ御陣
營ヨリ暇取テ路守安治ニ御書ヲ賜ル

山國道阿彌所ニ素仗掛見熟高シ難祝意
ノ就上方忽劇從敵兵傷ニ由ルハ此等
有ル様は是等ノ事至ル所也今ノ日合上
洛ノ条於家子志可ハ心易ハ程城織居
リノ條今省略ハスル所也

八ノ朔日 家康

暇取テ路守安

二日羽柴肥前守利長カ軍勢進テ大聖寺町
口ヲ破リ城中ニ攻入ル城兵山下ニ出張シテ是ヲ支

二ト欲スルト云斥寄手ノ猛勢競ヒ掛テ攻討ノ
間山下抱難キニ依テ陣ヲ本城ニヒキ入ル

三日前田孫四郎利政大聖寺ノ城鐘ノ丸ヲ攻破
テ城中ニ乱入ス城兵拒クテ得又城將山口玄蕃
頭其子山口右京亮ヲ始織田孫左衛門尉成田
喜太郎飯田又六郎松井宗助服部島右衛門尉其
子小市郎青木弥吉郎林五郎左衛門尉同姓弥十
郎吉井吉兵衛尉市辺清兵衛尉河村三郎右衛門
尉同姓善九郎石川理右衛門尉相山久三郎馬場五

郎兵衛尉今村喜左衛門尉福永藤藏河合八右衛
門尉高屋平兵衛尉竹林傳右衛門尉内藤右京
亮藤島五左衛門尉永井庄次郎中山之藏中村
然左衛門尉瓜生孫四郎八木七右衛門尉塚田喜
助北尾新右衛門尉片岡萬助富田半左衛門尉
赤新右衛門尉柳田兵右衛門尉飯田藤助南太
郎八物集女六右衛門尉吉田源太郎藤堂三郎
岡理今加藤内吉瀬村与兵衛尉等五百余人
皆戦死シテ大聖寺ノ城陥ル寄手ノ軍兵三七

命ヲ預シ疵ヲ被ル者其數多ク逆徒

是ヨリ先大谷刑部少輔吉継北国表ノ首將トシテ
手勢三千余騎相從軍勢京極宰相高次朽木河
内守昭俊中務太輔其子法路守寺西下野守戸
田武藏守其子戸田内記平塚因幡守木下山城守
同姓宮内少輔奥山雅楽頭上田主水正赤座久兵衛
尉等二万余騎北国表ニ出向シテ敦賀ニ至テ陣
ス越州北ノ庄ノ城ハ青木紀伊守逆徒ニ与リテ是ノ守
ル青木飛使ヲ敦賀ニ送テ告テ曰羽柴利長數

一万騎ノ兵ヲ率テ大聖寺ノ城ヲ圍テ是ヲ拔ント欲
ル由其間ヘアリ大聖寺ノ城ニ籠ル処ノ兵微勢也
此城ノ落去日ヲ經ヘカラス然ラハ利長當城ニ攻来ル
ヘシ速ニ援助ノ兵ヲキニ於テハ望ヲ弃テ出奔セント
欲ル由追々ニ早馬ヲ馳テ是ヲ告ル此日ニ至テ
大谷吉継敦賀ヲ出テ歸並ノ宿ニ至ルノ処ニ青木
重テ撤ラ飛テ今日己ニ大聖寺ノ城落去シ山口
父子ヲ始籠城ノ軍士等悉ク戦死ス依リ利長
大聖寺ノ城ニ入替ノ間今日中ニ北ノ庄ノ城ニ援

兵ナキニ於テハ當城拒キ守リ難キ由急ク告ル
又越前国府ノ城ハ堀尾帯刀吉晴去年ヨリ是
ヲ領ス吉晴ハ遠州濱松ノ城ニ赴キ府ノ城ニ家
臣等ヲシテ是ヲ平塚因幡守赤座久兵衛尉大
谷ヲ諫テ曰府ノ城ヲ不攻シテ指置ニ於テハ前
後ニ敵ヲ受テ戦フヲ難義ナルヘシ先府ノ城ヲ攻
落シテ後北ノ庄ノ援兵トシテ彼表ニ相働リヘキ
軍宜シカルヘキノ旨ヲ強テ諫ル大谷是ヲ許容
セス府ノ城ヲ攻ント欲ルノ間ニ北ノ庄ノ城陷ス

小松ノ城主丹羽長重モカヲ失ヘシ其上府ノ城ヲ攻
ルニ於テハ味方ノ軍士モ多ク討ルヘシ假令又府ノ
城ヲ攻テ吾カ兵多ク命ヲ殞サヌ是ヲ安ク扱リ
ト云氏此城ヲ守リトシテ味方ノ軍勢カ四五百騎
モ残ミシカスハ有ヘカラス然ルニ於テハ我カ兵弥
微勢ニシテ大敵ニ向テ戦ヒ難ニ府ノ城ヲ攻スニテ
敵ヲ籠置ク莫是幸ニ我城ノ留主居タリ北
国ノ敵ヲ退治セハ府ノ城ハ干戈ヲ勞セスニテ
吾ニ屬セシメシテ掌ヲ指カ如シ暫クモ逗留

スヘキニ非スト謂テ吉継則兵ヲ殺テ其夜ノ寅
ノ刻ニ及テ北ノ庄ニ至ル

常州水戸ノ城主依竹右京大夫義宣カモトニ
大神君御使トシテ小山ノ御陣當ヨリ島田次兵衛
尉ヲ指遣ハサレ義宣麾下ニ屬シテ軍忠ヲ竭
スヘシ此命ヲ救クニ於テハ速ニ兵ヲ殺テ御誅伐
可有ノ旨ヲ命セラル義宣陳テ曰 大神君ニ全
ク逆意ナシ然リト云凡質ヲ大坂ノ城ニ置リ故ニ
秀頼ヲ救テ會津御進祭ノ供奉スル事大坂

ノ聞ヘテ憚ル最モ三成景勝等ト同意タルニハ
非スト兩様一決セサルノ返答ラス依之水戸表ノ
拒キトシテ水谷伊勢守勝俊皆川山城守廣照
野州鍋掛ニ氏ス其外ノ軍勢カラ依竹ヲ拒カシメ
玉フ會津表景勝カ拒キトシテ結城三河守亦
康結城ノ有首將トシ伊達正宗米沢ノ有軍上出羽守美
光羽州山形ノ有佐野修理大夫野州佐野ノ有羽柴藤三郎
秀行津宮ノ有相馬長門守義胤奥州中村ノ有里
見安房守房州ノ有平岩主計頭親吉上州鹿橋ノ有

鳥居左京亮忠政上総国矢作ノ城在松平又八郎忠利後

駿下号ノ下總国小美川ノ城ニアリ松平新次郎一生後五左衛門ト号ス野田郡須

勘四郎信一上州布川ノ城ニアリ岡部内膳正長盛野田郡須

植村土佐守恭忠上總国勝浦ノ城ニアリ戸沢九郎五郎政盛

羽州松寄ノ城ニアリ各其居城ヲ堅ク守テ景勝力ヲ拒

四日大神君小山三十日御滞坐有テ東国ノ令

ヲ下シ玉テ今日江城ニ還御

六日石田治部少輔三成真田安房守昌幸三翰ヲ投ス

去ル三日之南状々日六日子之刻而依知山

ノ次第其人ヲ押是也

一先書キテ居キヤノ。系為其の其國一十五

こは重忠一ノ一に於て之を輝光也其増

右長大徳善物者方より方ノ中道より中

より其心は乃そ涼志川中島宿防山徳甲

州迄之其の城程弓矢を以て此方是也

しものには月も何夜上方書子有之程が

間石一の有星夜も其の程とて方ハ押是

一 丹津西より一國平均より勢半あり
曲高より色々然りと依り一帯は露
より七國城中より破所は内府所
君家より東教より掠新地より西は遠指
ゆるは妻居大坂より一帯は内府所

一 先主より中山大坂西より内府所あり
者あり余居より一帯は内府所あり
丸一帯は元より一帯は内府所あり
内府所あり一帯は内府所あり

千八百余箱宛りと右中流より朝日居方
系御患討御城中内府所より一帯は内府所あり
同火より好あり一帯は内府所あり

一 内府所より一帯は内府所あり
教より一帯は内府所あり
也より一帯は内府所あり
出陳り上より一帯は内府所あり
十年以上大樹より一帯は内府所あり
一帯は内府所あり

妻子を挽下りし或る上内務は子等
を引継ぎし事と厚く右に分ありし
衆人殺す方上の方殺す方相後死也
と尾三之回えり付捕家陣以て
よこし物と存陣中もあはれきり
関東一りありし者

一は書三より所領し三二之覚悟日本國
法得妻子を入室大極し端し可於仕室
可心易り角角に四方一形ありし

掌可付捕家格者要下は言わ仕室明
後日尾州表へ出は早と後、而も
由事等より一より集事所を御佐如
山子用た東一りし出等より尾州表へ
元人殺す方斗吉川安國寺下連長丈
目道とて昨日は死出り其外無の表書三
こは事より詮麻哉とら出輝元等自
然内府へ出合ら也りし後和道と書し時
分人殺す方より出た可ありしと

お定はけ申さく人好い五日いふ悲國て
り迎せお志海里の松仕をいり可申心
易り其上金銀の茶新入るのてさり後
亦取ていさく大岡申野し金銀平國玉
何奈申力取居し仁よまて一の五下りて
伏見表る物付九町名一内府に附し十
万石倉割着高申し引生地金銀す人
お定りたり

一 定りの事石の水神おの事三町也鯉鮒

小居る事加し御仁彌八事と申者生傳仕立
寄致し瑞海八事利教おの事其地場
度常力居名さく具是一切事痛子と負
お果体より常力し新地は石八町邊
中或少し高死仕。控者より常て下子
以用せしめたる親の御師の由内言之夜
よの久し一匠之申すの事由川内父子高城
為留ま在る日高純一は事下申の是日
伏見を攻り常ら取合し家申し者也

手前よりいふに父は廿二の日の
安らふ所は九所所不方飛空移り
よりこの極命を二と辨る輝え日前
より詳き

此の豆の交りたる夜中より
間々の字を是れ以上

八月六日 石田法部少輔

まのあつち

羽柴肥前守利長大聖寺へ城ヲ攻落シテ後進

テ加賀越前ノ境細呂木ニ至ル然ル処利長カ縁
者中川宗伴ト云者アリ大坂ヨリ加州ニ下ラニ下
欲スル処ヲ大谷吉継是ヲ敦賀ニ押苗利長カ
モトヘ一通ノ計状ヲ書シム上方一同ニ蜂起シテ
敦賀ヨリ軍船數千艘ニ取棄リ近日加州ニ
乱入ス其慮有ヘキノ由ヲ書シメ宗伴カ士
一人ニ此書竹筒ヲモタセ刑部少輔カ軍士ヲ少
是ニ相副テ遣ス是ハ宗伴カ士ヲ途中ニシテ
殺害セシカ馬也此謀書ヲ細呂木ニ至テ持

来ル利長披見シテ細呂木ヲ取テ兵ヲ金澤
ニ収メト欲ス此節若シ小松ノ城ヨリ兵ヲ出シテ
追討ス有ヘシト察テ利長カ臣山崎長川守
高山南ノ坊太田但馬守長九郎左衛門尉ヲ殿
トシテ御幸塚ニ止テ小松ノ城ヲ拒カシム

九日丹羽長重小松ノ城ヨリ兵ヲ出テ利長カ後
軍長九郎左衛門尉カ陳ヲ討ツ九郎左衛門
尉浅井昭ニシテ返シ合セ小橋ヲ隔テ挑戰
此ニ於テ長重カ軍士安孫子作太夫宮田小兵

衛尉成田助九郎先陣ヲ争テカ戦ス利長カ兵
水越縫殿助蹈田テ先ヲカケント進ム松平久兵
衛尉岩田傳右衛門尉大野甚之丞井上勘九工
門尉上坂主馬助等相次テ各槍ヲ合セ争戦
是カ為ニ小松勢突立ラレテ退散ス又金沢勢
モ戦疲レテ兩陣互ニ相引ニス然ル処ニ小松勢江
口三郎左衛門尉昭ノ細道ヲツタヒ山ニ登テ數
リ敵陳ヲ相伺フト云氏金沢勢數回ノ軍ニ疲
勞シ重テ進ミ戦ントモセス陳ヲ救ヒヘリス

十三日上方ノ逆徒退治トシテ馳上ルノ諸将等ニ
大神君ヨリ御使トシテ村越茂助ヲ遣ハシテ玉フ時
大神君吉田侍從池田輝政及ヒ池田備中守九鬼長門
守等三人各一紙ニ御書ヲ賜ル

其元後孫承承ノ旨以村越茂助を以て而
後合ハルノりは誠ノ出島ノ使ハ油断モシ
可ハ心易カク安西口ニシテ山ノ上ニ待テ

八月十三日

家康

吉田信臣

池田内中守

九鬼七ツツ

十六日石田三成兵ヲ大垣ヨリ発ス相從フ輩準備
前黄門薩摩侍從島津中務太補小西根津守
熊谷内藏助垣見和泉守相良宮内少輔秋月
長門守高橋左近大夫九毛三郎兵衛尉木村松若
衛門尉兵子傳等二万三千二百余騎
十九日東国ヨリ馳上ルノ軍勢等尾州ニ至テ此ニ
大神君ノ御進發ヲ相待ト云ク氏御出馬遲ク

ルノ間諸將皆疑心アリ然ル処ニ 大神君ヨリ御
使トシテ村越茂助尾州清洲ニ至ル并伊直政
本多忠勝先ツ村越ニ来會シテ御使ノ意趣ヲ
問フ村越其命ヲ語テ曰諸將其地ニ陳スル由苦
身ノ至也然リト云其戰功ヲ不聞諸將相議ニ
謀ヲ通シ兵ヲ祭シテ相戦ハシメ味方ノ證據ヲ
速ニ顯スニ於テハ吾快ク出馬スベシ若最初ノ
戦ニ味方利ヲ失フコトアラハ却テ後戦猶ヤス
カルヘキノ旨命セラレノ由ヲ村越竊ニ直政忠勝

ニ談ス直政忠勝是ヲ聞テ致命曾テ宜シカラス
大神君不日ニ江城御進祭アリ諸將此地ニ陳ス
ルノ旁ヲ回セ玉フノ御旨ノミニテ其余ノ言ヲ安
諸將ニ説ヘカラスト直政忠勝堅制止ニ村越
是ヲ諾ス村越退テ按スルニ今度ノ御使ニハ
思慮深キ老兵カ或ハ武功ノ勇士ヲ指越ル
ヘギニ然ルヲ愚意ノ村越ヲ以テ御使トシテ命
ヲ奉ルコト命ノ趣ヲ卒忽ニ諸將ニ相傳ヘシ
ナンカ為ナレヘシト思慮ス村越カ當著ノ

告ヲ聞テ諸將皆清洲ニ相集ル時ニ村越
直政忠勝カ旨ニ應セス 大神君ノ御旨ノ赴
ク委細ニ諸將ニ述フ時ニ福島左衛門大夫正
則加藤左馬助喜明此命ヲ聞テ諸將歴々
此地ニ集リ居テ曰テ経ルト云凡此慮ナキ莫
最面目ナシ先非テ悔テ不日ニ戦ニ其軍功ヲ
顯スヘキ由村越是ヲ達スヘキノ旨各御返答ス
廿日 大神君御書ヲ遠藤左馬助ニ賜ル
美濃國之内郡上郡今度為忠節一圓

進軍ト全テ有知リト委細令不申は下
申、上ニ得テ

八月廿日

家康

遠藤左馬助の

廿日東国ヨリ馳上ルノ諸將清洲ニ来會ニテ
攻テ岐阜ノ城ヲ拔ント軍ノ謀ヲ議ス福島左
衛門大夫正則謂テ曰味方ノ兵岐阜ヲ先ツ攻ニ
事ヲ敵モ豫メ是ヲ推察ス大山ノ城ヨリ岐
阜ニ後援アル由其聞ヘアリ然ニ於テ大山

ノ城ヲ攻ヘキノ由兼テ陳中ニ觸促サハ其旨ヲ
傳ヘ聞テ犬山ヨリ岐阜ニ來ルノ援兵等皆岐
阜ヲ捨テ犬山ニ引返スヘシ其時指シ違ヘテ敵
ノ跡ヲ遮リ岐阜ノ城ヲ攻ヘシ岐阜ノ城陷ルニ
於テハ犬山ノ敵ハ已レト退散スヘシト相計ル諸
將各此義ニ同シテ明廿二日ノ曉天ニ犬山ノ城ニ
祭向スルノ間其用意可有ク旨夥ク陳中ニ
觸催ス敵ノ謀者是ヲ聞テ急キ犬山ニ告ル
亦石河備前守伊藤對馬守兩人ノ方ヨリ飛

使シ岐阜ニ馳テ是ヲ告ル依テ犬山ヨリ援兵
稻葉右京亮同姓彦六郎加藤左衛門祐等
此告ヲ聞テ岐阜ヲ奔テ犬山ノ城ニ馳歸ル
依テ福島カ思フ圖ニ是ヲ謀ル
東国ヨリ馳上ルノ諸將等相議シテ岐阜ノ
城ヲ攻ル軍列ヲ定ム福島左衛門大夫正則ヲ
大守ノ首將トシテ羽柴越中守忠興藤堂
佐渡守高市黒田甲斐守長政加藤左馬助
喜明田中兵部少輔長政其子民部少輔生駒

讚岐守一正寺沢志广身廣高峰直賀長門
守至鎮京極侍從高知井伊侍從直政本多
中務太輔忠勝等萩原ノ渡リテ越テ岐阜
ノ城ニ対向セシメント定ム池田三九衛尉輝
政ヲ搦キノ首將トシテ池田備中守忠吉淺
野左京大夫幸長山内對馬守一豊有馬玄蕃
頭豊氏戸川肥後守達安一柳監物直盛
堀尾信濃守忠氏木下右兵衛尉等北方河田
ノ渡ヲ越テ岐阜ニ相向ント議ス時ニ輝政カ云

岐阜ノ城押ヘトシテ搦キニ向ニ事本意ニ非ス
願クハ大手ノ陳ニ対向シテ先陣ニ軍忠ノ劬
ント請フ直政忠勝是ヲ聞テ、大神君ノ御勝
利ヲ不思身ノ武名ヲ心掛ルノ条輝政ハ似合
サルノ由ヲ相諫ルニ依テ池田理ニ屈テ是ニ應ス
真田安房守昌幸次男九衛尉佐父子野州
小山ヨリ信州ニ歸テ小掛伊勢山ニ要害ヲ構
テ旗ヲ揚ル嫡子伊豆守信幸ハ、大神君ノ
御味方タルニ因テ父ノ昌幸輕卒ヲ出シテ信

幸カ領内ノ邑里ニ放火ス依之信幸止ムラ
得スミテ兵ヲ殺テ又昌幸カ取テ伊勢山
若ク攻テ其利ヲ得タリ此由ヲ江戸ニ至テ註
進ス因テ大神君ヨリ御書ヲ信幸ニ賜ル

書状披見夜更ニ至ル信幸ハ口在御口
境目多量等大夫ヨリ申事ニ由ルニ
亦ニ事々々々々々々々々々々々々々々々
系統ニテト江所ニシテ得ル

八月廿一日

吉田伊豆守

廿日池田輝政浅野幸長山内一豊有馬豊氏
戸川達安堀尾忠氏一柳直盛等軍ヲ死セテ
河田ノ河岸ニ臨ム逆徒百ニ越前守三千余ノ
兵ヲ卒テ新加納ニ出張シ向ノ河岸ニ輕卒ヲ
進テ川表ヲ防ニト相支ル一柳監物直盛ハ
此辺黒田ヲ領知スルノ間兼テ川ノ案内ハ能
ク知りタリ其上前夜亥ノ刻ニ及テ宿禰ニ入テ
追ハシメ木曾川ノ浅深ヲ審リ計リ知ル依

之今日午ノ刻ニ至テ一柳直盛木曾川ノ下ノ
瀬ニ馬ヲ入テ涉ス輝政カ先陣伊木清兵衛
尉是ヲ見テ上ノ瀬ノ漲ル浪ニ馬ヲ馳入レハ
浅野堀尾等是ニ次テ軍勢各川ヲ涉シ向ヒ岸
ニ上テ圍ヲ突テ攻掛ル岐阜ノ城將中納言有信
副魔堂ニ出張シテ軍使ヲシテ下知シサス敵暫
ク川岸ニ相支テ拒キ戦フト云凡味方ノ猛勢川
ヲ涉リ競ヒ掛テ奮討ノ間防々事ヲ得ス敵コ
トクク敗走ス而味方ノ軍士等是ヲ追討ツ

二里百々越前守津田藤兵衛尉其子津田藤三郎
數度返シ合テ相戦フ津田藤三郎赤キ母衣ヲ掛ル殿ス兼
松又四郎黄ナル母衣ヲ掛ル是ヲ追掛數刻相戦フト云凡
其雌雄ヲ決セス此ニ至テ戸川肥後守達安槍
ヲ合テ戦功ヲ尽ス飯沼勘平ヲ池田備中守長
吉討テ其首ヲ得タリ藤田權左衛門尉ヲ輝政カ
軍士是ヲ討取ル其余前田十九衛門尉武市善
兵衛尉小河藤兵衛尉等ヲ始七百余人是ヲ追
討テ首級ヲ得タリ岐阜ノ城ヨリ布施屋ニ至

テ敵出張シテ陣スルト云氏新加納ノ味方勝ニ棄
テ夥ク困ラズテ競ヒ来ルノ間敵布施屋ヲ退
散シテ岐阜ニ引入ル御味方ノ軍勢其夜ハ川辺ニ
此ス今日河田ノ渡リヲ越テ新納ノ軍ニ逆徒ヲ
數百人討捕ルノ由池田輝政檄ヲ江戸ニ飛テ注進
ス萩原ノ渡リニ相向フ大寺ノ軍勢福島正則羽柴
忠興藤堂高虎黒田長政加藤嘉明田中長政
京極高知生駒一正寺沢庵高井伊直政本多忠
勝等各船筏ヲ組テ川ヲ渡シ向ノ岸ニ上テ近江

ノ民屋放火シテ太田堤ニ陳スルノ処ニ脚カ来テ云リ
今日午ノ刻北方搦手ノ首將池田輝政川ヲ涉ヒ新
加納ニシテ大ニ戦テ敵數百人ヲ討捕ルノ由其日
黄昏及テ告来ル福島是ヲ聞テ當キハ大手
ノ先隊トシテ搦手ノ勢ニ先キヲ越レイテ夕此陣
ノ戦功ナキヲ無念也ト首將福島ヲ始テ諸士
皆怒ヲ合テ其夜ノ戌ノ刻ニ至テ軍勢ヲ合テ岐
阜ノ城下桑木原ニ攻寄セ寅ノ刻ニ及ヒ進テ町
口ノ捲門ニ押詰ル

廿三日黎明寄手ノ軍勢固ク登テ岐阜ノ城下高
町ヲ破擗手ノ首將池田輝政及ヒ浅野幸長馳来
テ福島ト爭テ町口ニ攻入ル岐阜ノ城ノ若瑞龍寺
ノ砦ハ相原彦右衛門尉是ラ守ル浅野幸長加藤
喜明羽柴忠興福島正則等先鋒ノ軍勢攻テ是ラ
破ル城兵拒キ戦テ敵味方ニカラ尽ク福島進
テ奮戦フ寄手ノ猛勢頻リ攻ル間瑞竜寺
ノ砦遂ニ破ル敵ノ部將相原彦右衛門尉ハ浅野
幸長カ軍士岸六右衛門尉カ從卒是ラ討捕ル

伏藤主殿助ヲ勇ラ震テ戦死ス川瀬九馬允瑞龍寺
ノ砦ヲ弃テ岐阜ノ城本丸ニ敗シ入テ中納言秀信
ト一所ニ加ル大手七曲口ニシテ木造花衛門依津田
藤兵衛尉其子津田藤三郎百々越前守等踏
留リ坂中ニ於テ奮戦フ正則忠興喜明等一所ニ
集リ士卒ヲ指揮シテ相戦ハシム坂口ヨリ武藤若
ノ圍ニ於テ敵兩度小返シテ味方ノ兵ヲ追拂フ味
方亦敵ヲ慕テ攻登ル爰ニ於テ忠興カ兵沢丹
次八郎中島傳左衛門尉ヲ討テ其首ヲ得テ

リ武藤紫石ニシテ暫ク支テ敵味方互ニ苦戦
ス城兵遂ニ利ヲ失ヒ引退テ七間櫓ニ指籠
ル福島カ兵士吉村又右衛門尉險阻ヲタイ
ヨリ眼ノ櫓ニ登ル福島カ從卒等五六騎吉村ニ
相次フ京極侍從高知荒神カ洞柴田古屋敷
ヨリ達目口ヲ攻登ル池田輝政福島ト先キ
争テ岐阜ノ所口ニ至テ攻入ル時福島川越ノ
軍ニ池田ニ戦却ヲ越サレ其遺恨アルニ依テ池
田カ軍勢城中ニ攻入ラント進ム先途ノ家ニ火ヲ

放テ燒立ル池田カ軍士等煙ニ隔テラレ進ム事ヲ
得ズ池田怒テ其攻ロヲ弃テ長良川ノ边ニ廻リ
水ノ手ヨリ攻登テ城ニ乱入シ輝政カ旗ヲ奉九
ニ建ル寄手ノ多勢夥リ攻討ノ間城兵利ヲ
失テ奉九ニ窮廻ス時ニ木造右衛門伏降ヲ乞
テ和議成ル城主秀信岐阜ノ城ヲ避渡シテ
城下ニ於テ自殺セントス福島正則是ヲ押留メ
割スルニ因テ自害ヲ止テ茅洗ノ里ニ下ル
秀信後
年高野
山ニ於テ岐阜ノ城ヲ避渡スノ間福島正則城ヲ
病死ス

請取ラント欲ス亦池田輝政是ヲ論シテ曰本城
ニ先登シテ旗ヲ建ル我ヨリ先ニスル者ナシ然
ルニ於テハ輝政城ヲ請取ニト爭ヒ論ス直政忠
勝等正則ヲ諫制スルト云凡正則曾テ許容セス時
ニ輝政カ曰前ニ大敵アリ今之友ニ武功ヲ爭ハ忠ニ
非スト謂テ直政忠勝ニ任ス依之遂ニ正則ヲシテ
岐阜ノ城ヲ請取ニム此日正則輝政檄ヲ飛シテ
岐阜ノ城陥ルノ由江戸ニ注進ス岐阜ノ城後援ト
シテ石田三成カ軍士松江島兵衛尉末九郎兵

衛尉兵ヲ發テ河田ノ堤ニ出張ス又島津カ軍勢
後陣ニ次リ黒田長政藤堂高序田中長政生
駒一正等岐阜ノ城守手ノ先陣速ニ城ヲ陥シ
敵ヲ悉ク討捕ルノ由ヲ聞テ為方ナキ処ニ岐阜
ノ城後詰トシテ敵河田ニ出張スルノ告ヲ聞テコ
レ吾等カ今日ノ職分ナリト勇ミ悦テ軍ヲ發
テ是ニ向フ然リト云凡川浪夥ク漲リ洛滂ル
ヘキ様ナシ時田中兵部太輔長政カ守口ニ淺
キ瀬ヲヨ守出シテ田中長政進テ川ニ乘入ルノ

間諸卒皆是ニ次テ一同ニ川ヲ涉ル敵川岸ニ
出向テ是ヲ拒ト云斥多勢川ヲ涉テ其勢ヒニ棄
ミテ奮討ノ間敵忽ニ敗北ス是ヲ追軍一里余
黒田長政自ラ槍提ケ北ルヲ追テ石田カ軍士渡
辺新之助ヲ討捕ル部将千ヲ碎テ力戦スル故
其手ノ士卒等猶軍功ヲ尽ス石田カ臣松江甚
兵衛尉殿ニテ退ク田中カ從士辻勘兵衛ト名
乗テ松江ヲ槍付ル松原善左衛門尉爰ニ馳來
テ松江カ首ヲ得タリ其餘御味方ノ軍勢首ヲ

得ルヲ數百級敵悉ク敗亡スホシ九郎兵衛尉ハ堤
ヲツタヒテ大垣ノ城ニ北ケ入ル

此日台徳院殿ヨリ御書ヲ真田伊豆守信幸ニ賜
態々々書上ル仍明廿四日此地に在ル者ちぬて
お儀々々其分心はと彼表一の有り出
程大なる原お様を中多は信幸とよみはる

八月廿三日

秀忠

まのひらき

廿四日台徳院殿真田安房守昌幸御征伐ト

シテ江城御首途有テ信州ニ御進兵アリ供奉ノ
輩大久保相模守忠隣同姓治右衛門尉忠依本多
依渡守正信榑原式部大輔康政酒井備後守忠
利其子忠勝本多美濃守忠政本多豊後守康
重河丹宮内大輔家次木村右近大夫忠政仙石越前
守誦訪小太郎頼永日根野筑後守石川玄蕃頭
等三万八千七十余騎 台徳院殿信州ニ着御真
田安房守昌幸カ榑籠ル上田ノ城ヲ圍メシメテ
御味方ノ軍勢カ城近キ也ニシテ芥田スル処ニ城中

ヨリ輕兵ヲ發テ是ヲ追ヒ掃ント歎ク是ヲ監スル御
味方ノ軍士朝倉藤十郎宣政後ニ筑後守ト号ス有藤久右
衛門尉小野次郎右衛門尉辻太郎助戸田半平鎮
目市左衛門尉中山勘ヶ由左衛門守七人進テ相戦
ヒ槍ヲ合セ敵ヲ城門ニ追入ル此是ヲ真田ノ七本槍ト云太田善次
夫ヲ以テ槍照ノ敵ヲ射ル牧野右馬允康成其
子駿河守忠成本多美濃守忠政カ軍勢等
是ニ次テ競ヒ攻ム忠政カ軍士浅井小右衛門小田
角右衛門尉能ク戦フ本多依渡守正信大久保

相模守忠隣是ヲ制テ御味方ノ軍勢ヲ引取ラシ
ム時ニ 台徳院殿命有テ白軍令ヲ背テ列ヲ乱タシ
卒尔ニ拔掛スルノ条曲事タルノ旨魁八人ノ士ヲ怒
リ玉ヒ卒多忠政牧野康成カ魁隊長ノ士ヲ誅スル
キノ由命セラレ、時ニ牧野言上シテ曰全ク從卒
等カ卒尔ニ非ス康成カ指揮シテ是ヲ戰ン云
進テ康成其罪ニ死シト言テ從士ヲ不殺
台徳院殿弥是ヲ御憤有テ牧野康成其子忠
成及ヒ魁八人ノ士ヲ其科役トシテ我妻ノ若シ守ラシ

メ玉フ

市橋下然守長勝 大神君ノ鈞命ヲ奉テ野州ホ
山ヨリ福島正則ト相伴テ長勝カ居城濃州今尾ノ
城ニ歸リ来テ是ヲ守ル今尾ノ城ノ拒トシテ逆徒
高木八郎兵衛尉多藝ニ陳ス丸毛三郎兵衛尉福
塚ノ城ニ在テ大垣ノ城將伊藤彦兵衛尉ト相議
シテ藤川ノ向ヒノ岸大久礼村ニ陳ヲ張ル市橋長
勝城中ヨリ賀地村ニ出張シテ川ヲ隔テ矢軍ヲスル
月廿四日ノ黎明ニ長勝不意ニ川ヲ涉テ相戦ニ丸

毛伊藤ヲ追テ退テ其利ニ乘テ進テ福塚ノ城ヲカ
コメハ城將丸毛城ヲ避ケテ大垣ニ走ル依之長勝福
塚ノ城ニ入替テ是ヲ守リ大垣ノ城ノ通路ヲ指塞
ク大坂ノ城ヨリ大垣ニ遣ス内通ノ陰書ヲ携ヘ忍ミ
通ル者ヲ度クニ生捕テ福島カモトニ遣ス

稻葉藏人通道 大神君ノ台命ヲ奉テ野州小山
ヨリ馳歸テ岩手ノ城ヲ守ル九鬼大隅守嘉隆兵ヲ
祭テ岩手ノ城ヲ伺フ城主通道郭外ニ出張シテ輕
卒ヲ進メテ是ヲ拒クノ間嘉隆戰フ莫ク不得兵ヲ

卒テ退散ス

是ヨリ先富田信濃守野州小山ニ在陣スルノ時
大神君富田ニ命有テ勢州ノ渡海安カラザレハ上方
手遣テ自由ナラス汝速ニ本国ニ馳歸テ渡海ノ往
来自由ナラシムヘキノ由即旨ヲ奉テ分部左京亮
シ相伴テ小山ヲ祭テ三州吉田ニ至テ小船百余
艘ヲ相促シ勢州ニ赴ク沖中ニ於テ九鬼嘉隆
カ賊船ニ行逢フ時ニ富田カ船ニ鎗掛嘉隆
カ船ニ引付ル富田旧友ノ好ヲ陳ル依之纜ヲ

解テ免レ放ツ富田野ノ口ヲ遁レテ津ノ城ニ歸リ入
ル分部ハ吾カ居城上野ノ城要害惡シテ守リ難
キニ依テ津ノ城ニ加リ東方ノ口ヲ警衛ス古田兵
部重勝小山ヨリ松坂ノ城ニ歸入ルト云氏敵イニタ寄
セ来ラサルノ間士卒ヲ分テ津ノ城ニ加ル昨廿三日ノ
曉天ヨリ逆徒ノ軍勢津ノ城ノ東北ヲ圍テ攻テ
ニ至テ毛利カ軍勢城ノ西ノ方ヲ通テ南門ヲ攻破リ
三ノ丸ニ乱入ス東方ノ口ハ分部是ヲ守テ拒キ戦カ
ト云氏完戸備前守多勢カヲ以テ攻討ノ間防ノ夏

ヲ得ス分部兵ヲ城中ニ引入ル毛利カ魁兵是ニ攻テ
城ニ攻入ル城兵苦戦シテ是ヲ追出シ城門ヲ閉ル
利カ先隊中川清左衛門尉追テ城ニ攻入リト欲テ
戦死ス井上清右衛門尉城中ニ紛レ居テ翌朝首ヲ
提テ遁レ出ル

廿五日 大神君太田原備前守ニ兩書ヲ賜ル

今多勢ノ山上方ハ馬ノ倅を以テ追リ去
レ小勢ノ口ヨリ日丸ノ京場具口ニ出ルハ
しハ其ノ口ヨリ有レ道ニ至ル一ノ并果

为具トモてあるは

八月廿五日 家康

吉田系保あり

其日池田三左衛門尉輝政カ河田合戦ノ注進懋今
日午ノ刻江戸ニ参着ス 大神君其戦功ヲ褒セ
テ輝政ニ御書ヲ賜ル

廿二日之注進状々廿六日午ノ刻系保ハ
平之元川表赤松ノ事ニ及ニ戦歎あり
是付捕縛事ハ注進討ニ由定心ハ能

倭兵ノ備各ハ如彼雨モ右右有クモ
得

八月廿六日 家康

吉田信臣あり

此日津ノ城中ヨリ矢文ヲ飛テ和睦ヲ調ヘ城ヲ
避渡シ城将富田之洛髪ニテ高野山ニ走ル則
津ノ城ニハ蒔田中卿山崎等入替テ是ヲ守ル
天下混一ノ後 大神君
富田ヲ召テ奉領ヲ賜ル 大神君先日御使トシテ遣ハ
シテ玉フ安藤次右衛門尉正次尾州清洲ニ至リ

岐阜ニ往テ敵城ノ没落ヲ巡視シテ今日帰来テ
台聴ニ達ス時ニ大神君敵ノ尸骸何レノ方ニ向
止問セ玉フ正次カ曰大垣ノ方ニ向フ 大神君是ヲ
聞玉テ敵ノ敗亡ヲ知り玉フ
廿七日池田輝政福島正則岐阜ノ城ヲ攻落スノ註
進状今日末ノ刻ニ至テ江戸ニ参著ス 大神君御
感悦不浅ニテ御書ヲ輝政ニ賜ル

岐阜ノ事我早ニ知ル所也此ノ事何レノ事
中ノ難ヲ冬ニ好ニ中納言ニ中山道ニ押
上ニ由リテ我ホハ臣女口押テ山ノ可ク御卒
尔後ニハ御事ニハ我ホ女子ニ待テ御
五ノ澤ニ

八月廿七日 家康

吉田信俊

此日丹伊直政本多忠勝ト議テ一柳益物百盛ヲシ
テ長松ノ城ヲ守ラシム石田三成福原右馬助ト相謀テ
間謀ヲ以テ長松ノ城ヲ度ニ伺フ直盛士卒ニ下知
シテ若他邦ヨリ来ル者アツハ僧俗ニヨラス是ヲ搦

捕ルヘシト云々大垣ヨリ来ル者アリ是ヲ四人生捕テ
大垣ノ奇謀ヲ問フ

廿八日藤堂佐渡守高帑カ注進ノ使者今日江戸ニ
至テ冬ニ著ス其使池田久兵衛尉ニ黄金十両ヲ賜ル
此日大神君浅野彈正少弼長政ニ御書ヲ賜ル

書状據之ル仍チ廿二日三川之裁ニ存テ裁ニ致
子人ニ付捕物ニテ三日後阜城ニテあり一人七
不度皆討ハ近道ノ所ニ乘来三ノ出馬ハ山中
細之ハ中山道ニテ所カハ相成以向テ山見

在教ハハ今方在東ニ更ニ陽然也

城ヲ構ヘテ分付子テ不明一人ハ不致ハ討捕
以子捕ルニ由テ内ハ侍是トハ控量ノ於羽
後音ノ時ニ至ク候

八月廿八日 刀水康

浅野彈正少弼

浅野長政故有テ去年ヨリ甲州ニ蟄居スルト云レ聊
モ誤ナキノ旨披露アルニ依テ 台徳院殿中山道
御進奏ノ時召テ長政供奉ス

廿九日 大神君羽柴美作守親良三郎書シ賜ル

徳カシ

一 去年二月 隈州寺田松平三平と相儀ありて
年々人殺志ん、刑ヲお子と家ヲ羽三九の松
平と殿と我乃一氣に崩すといふ事あり

一 廿三日 高尾山を破

三三九多の好と云程と云中、同自奉おあり

一 同日 法部寺浦島津者共各為法浩郷へお出
名宗向道崩るる川に又一人は度は計あり

一 廿四日 依知山一押法、由中平、定と福有、白あり

一 朔朝日 今出馬あり

一 自然景掃お儀、共城を望園よりお持、美肝

要の事

一 お具口お儀者正宗三河守、五三白安房任儀は

那儀理者又平宗三行次、松平五白、安房多丸、系

一 松平亦八、中平、分平、可入礼、系其口、望を

よりお抱、よりお、よりお、よりお

一 一、一、一

系原

相承美作也

此日堀尾信濃守忠氏ニ大神君ヨリ御書ヲ賜ル

レ方徳州名公我レ別レ方家印に付捕首
信又々此見誠心此能氣先此口あつて誓
之。從明日令出する所を言ふ。其は後

一月廿九日

家康

堀尾信濃守也

九鬼長門守守隆 大神君ノ台命ヲ奉テ池田輝政
ト相伴テ野州小山ヲ祭テ三州吉田ニ到リ夫ヨリ本

国勢州ニ馳歸リ又大隅守喜隆逆徒ニ与テ長門
守カ鳥羽ノ城ニ残シ置リ從卒等ヲ追出シテ新
新宮ノ城主堀ノ内安房守ヲ招テ彼ト共ニ鳥羽ノ
城ニ楯籠ル長門守擧シ東国ニ飛シテ此由ヲ
大神君ニ注進スルノ処ニ守隆ニ任セラルノ間宣
リ謀ルヘキノ旨命セラルニ依テ長門守使ラ又
大隅守及ヒ安房守カ許ニ遣シ鳥羽ノ城ヲ避ケ
渡スヘキノ由數回言テ及ヒ和ラセフト云凡兩輩
取テ聽カス長門守為方ナク同国畔棄ノ旧墨

ニ戦ニ要害ヲ構ヘテ是ヨリ後父子屢挑戰フ
長門守カ從卒村田七太夫ニ藤祐介志田右近
次夫等多ク戦死ス敵モ堀ノ内カ臣諸政所
具余多ク命ヲ殞ス逆徒氏家内膳正桑名
ノ城ヨリ兵ヲ發テ畔棄ノ城ヲ攻ム長門守是下
奮戦テ大ニ勝テ首級ヲ得タリ則其首ヲ
持タシメ東國ニ獻ス

伊賀国上野ノ城主羽柴伊賀守野州小出
リ本國ニ馳歸ルト云凡伊賀守イマタ歸國セ

カルノ以前ニ城ニ残ニ置置是ヲ守ラシムル從卒
等上野ノ城ヲ避テ逆徒ニ用渡スノ由伊賀
守途中ニ於テ此告ヲ聞テ進退途ヲ失テ
後関ヶ原ノ魁兵ニ相加ル 濃州高瀬城
主徳永壽昌 大神君ノ釣命ヲ奉テ野州小
山ヨリ高瀬ノ城ニ歸リ来テ是ヲ守ル
長島ノ城ハ福島掃部助野州小松ヨリ歸テ是
ヲ守ル掃部助勢カタルニ依テ山岡道阿弥援
兵トシテ是ニ加ル 一

逆徒原隠岐守長島城ノ拒トシテ太田城有
大垣ノ城ハ逆徒ノ首將石田治部少輔小西櫻津
守備前中納言島津兵庫頭同姓中務少輔福
原石馬頭熊谷内藏助伊藤長門守木村宗右
衛門尉其子木村傳藏丸毛三郎兵衛尉初福
城ヲ守後大垣ノ城ニ加ル秋月三郎垣見和泉守高橋主膳
正同姓九郎二万三千六百余騎是ヲ守ル
大山ノ城ハ逆徒石河備前守本丸ニ在リ稻葉
右京亮貞通其子稻葉彦六郎典通関長

川守等ニ大坂ヨリ弓鉄炮ノ輕卒ヲ加ヘシメ後
兵トシテ大山ノ城ニ来ル加ル其兵七千七百余
騎遠藤左馬助西尾豊後守兵ヲ殺テ稻
葉右京亮貞通カ居城郡上ノ城ヲ籠衣以攻
ム稻葉父子大山ノ城ニ在テ此告ヲ聞テ軍ヲ祭
テ拒キ戦フ金太兵衛御法印長近其子金
太虫雲守可重東国ヨリ歸テ遠藤西尾
ニ加テ郡上ノ城ヲ攻討ツ金太カ從卒
西殿吉助同姓左近大夫平井孫四郎飯沼

弥左衛門尉等戦テ首級ヲ得タリ遠藤西
尾カ軍士各軍功ヲ尽ス兼テ稻葉モ志シ
大神君ニ通シ麾モ下ニ属テ軍忠ヲ励サン事
ヲ願ト云レ三成カ催促ニ依テ是非ナク一端
是ニ從フ時ヲ伺ヒ大神君ニ属セシ夏ヲ請フ
此旨ヲ竊ニ遠藤西尾ニ告テ遂ニ和議成ル
神戸ノ城ハ逆徒羽柴下總守是ヲ守ル其兵ハ
百余騎水口ノ城ハ逆徒長束伊賀守大藏大輔
是ヲ守其兵三百六十余騎

龜山ノ城ハ逆徒岡本下野守是ヲ守ル其兵
六百三十余騎海上ノ城乃ヒ鳥羽ノ城ハ逆徒
九鬼大隅守是ヲ守其兵四百余騎
曾祿ノ田原守ハ松平石見守是ヲ守ル逆徒
島津氏樂田ニ陳シテ度々輕卒ヲ進メテ曾
祿ノ田原ヲ侵シ龍毛ノ町ニ故火ス并伊直政
本多忠勝水野六左衛門尉勝成ヲ招テ
是ヲ議テ勝成ヲシテ曾祿ノ田原ヲ守ラシム
島津重テ輕兵ヲ出シテ曾祿ノ田原ヲ籠メ

ニト欲ス水野勝成兵ヲ及段ニテ夥リ是ヲ拒ル
間島津カ軍勢カ狼狽ニテ敗亡ス其後再々
敵此ヲ伺フ事ヲ不得又和乎丹波守康長
卒姓勝成ニ加テ曾祢ノ壘ヲ守ル

家忠日記追加卷之十五 終

